

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	32 / 2013 / 1 - 23 (再編集版)
タイトル	青森の昔の遊び座談会(下) 雪消えから季節はめぐり、多彩な遊びがー
著者名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青森の昔の遊び座談会(下)

雪消えから季節はめぐり、多彩な遊びが —

編集 部

室谷(司会) この前(前号掲載)、昔の遊びを話し合ったときはちょうど記録的な積雪の冬から解放される時。今度は、先日11月18日(日)に平年から12日遅れの初雪があつて、まさに冬に突入というときです。まあそんなことで実感が湧かないかも知れないが、これからどんどん酒が入って暑くなるので、春が来た気分で大いにやりましょう。

徳 差 わたくし、ジャイゴ(田舎)の筒井からバスで来て堤で降り、そしてここまで歩いてきたんですが、寒いなのって今日は最高!

室 谷 青森の春は雪が消えて土が見えてくる。川が雪解け水でザーザーと流れ、やがて緑が芽生えてくる。「やぶなべ会」の面々は工業製品として作られた道具の遊びよりも自然の中に遊びを見つけた。それが一番で土、石ころ、草などとさまざまだったのでは。

棟 方 その通り。青森は雪国、すごい雪が積もっている。まず雪切りから始まった。冬場は雪が降っても今みたいに片づけない。積もりっぱなしで道路は1m以上も雪が積もっているでしょう。3月になると一斉に雪切り。土が出てきて一番最初にやったのがメンコだとか釘打ち、これはコゲと同じ遊び。それに缶踏みとか缶蹴りだね。ちょっと長めの缶をもってきてこれを蹴る。これはかくれんぼになる。それに騎馬戦。

工 藤 ビー玉もあつた。



写真1 座談会出席者 名前の()内の番号は前号1ページの地図に対応。

と き : 2012年11月19日

室谷洋司(10代、15年2月生、居住地番号⑨)
山道忠郎(14代、18年12月生、居住地番号④)

と ころ : 青森市堤町、花祥

五十嵐豊(6代、10年4月生、居住地番号⑤)
徳差幸広(6代、11年1月生居住地番号⑧)

棟方 ちょっと遊びとは違うが、私のところ(家の周り)はイカルんですイカルって分かりますか？洪水です。春先は洪水になり周りの田圃が全部、湖のようになる。するとイカダ遊びをする。田圃の中を漕いで遊ぶんです。

五十嵐(豊) それは一般的でない。棟方のところは特別だ。

五十嵐(正) 雪切が終わって土が出れば、春の匂いがしてぱっと冬の遊びから春の遊びに切り替わってしまう。

徳差 土が出ると遊び……。ところであんたたちの方には土があったんですか？ 都会でしょう。道路は舗装されていたんではないですか。

棟方 舗装なんてない。黒土が出ると日も長くなるし、朝から暗くなるまで殆ど遊びだ。

徳差 筒井の方では今の青森高校のところに五連隊があつて、そこまでは舗装されてあつたがそれから村の方はまったくの砂利道。私はちょうどその辺に住んでいたのではっきり覚えているが、そこからは村人が総出で雪切りをしました。

室谷 そうそう、もうこれ以上、雪が降らないという3月になると総出でやった。私は高田で町(青森市街地の中央部)からは大野、荒川、高田と田圃を間において10キロもある。高田の人は、高田から荒川まで総出で雪切りをする。荒川の人は大野までを分担したと思うが、刑務所通りというまっすぐの長い道路があるね。あまりにも長すぎて荒川の人だけでやったのかどうかは分からない。昭和20年代の前半は小学低学年だったが、頭に強く残っているのは五十嵐(正)さんは春の匂いと言ったが、私の場合は“マノクソ(馬糞)の匂い”。冬場は足で歩くか、馬ソリでしょう。ひと冬の馬糞が凍り付いたまま道路が固まって、ツルハシで砕いてスコップで取り除いていく。(雪切りのときの)雪は白ではなくて黒とか茶色で異様な匂いが充満していた。



写真2 座談会出席者 石郷岡さんは紙上参加で写真には写っていない。

小山内孝(顧問、12年9月生、居住地番号①)

五十嵐正俊(3代、8年3月生、居住地番号⑤)

棟方啓爾(6代、11年4月生、居住地番号⑦)

扇野千恵子(21代、25年5月生、居住地番号②)

工藤芳郎(17代、22年1月生、居住地番号⑥)

石郷岡總一郎(25代、29年4月生、居住地番号③)

土の上でビッタ、ビタ、パッチ

工藤 棟方先輩はメンコと言ったが、私たちはビッタでメンコとは言わなかった。

棟方 今、分かりやすく言ったが、ビッタですよ。

扇野 メンコのことを、蟹田ではパッチと言いました。

室谷 それは面白い。調べて見たらメンコは土地によって呼び方が色々で青森県では、だいたいビッタとかビタ。北海道ではパッチとも言う。ということは津軽半島の蟹田とか上磯地方の北海道に面したところでは、北海道とのつながりがあったのでは。それではビッタと缶蹴りから具体的にやりましょう。

工藤 ビッタには丸いのと四角のがあって、この二つは違うんだ。

五十嵐(正) 丸いのは買わなければならない。四角いやつは紙を折ってつくる。新聞紙とか何でもよい。買わなくてもいいから安上がりだ。細長いカードもあって息を吹きかけてひっくり返すのもあった。吐く息を強めるのに舌を丸めて一気に吹きかける。さらに首を上げて息を変えてひっくり返す。

徳差 それ、四角いのはペアではないか。

工藤 オレだちの場合はパッコと呼んだ。

五十嵐(豊) ビッタには色々な遊び方があるんだ。

——— ここで、ビッタとかペアの遊び方などがさまざま出てきて收拾がつかなくなった。ある程度離れた町と村どうしであれば遊び方の違いも分かるが、隣の町内の場合でも異なるとか、同じ町内でも遊びのルールがいっぱいある。話は大混乱!

室谷 一般的かどうかは分からないが、まず二つに絞って話しましょう。ビッタですが、1尺(30センチ)ぐらいの丸い土俵があって、その中に置いた相手のビッタを土俵から出すのと、徳差さんが言った相手のビッタをひっくり返すのがある。それから皆さんの話ではビッタのカードは、おおよそ直径が10センチぐらいで、ほかに一回り大きいのと、小さいもの、3種ほどがある。ほかのサイズもあったかも知れない。大きいのが有利というか威力がある。そこで、勝負するとき手持ちのカードには枚数に制限があるのかどうか。

棟方 枚数に制限はない。ビッタは子供たちの財産みたいなもので、勝負して相手のカードを自分のものにしていく。それぞれのビッタは駒みたいなもので、五十嵐(豊)が言ったように小さいビッタで大きいビッタを外に出していけば最高。それが快感の極み。



図1 ビッタ打ち 山口氏原図(1975)。この土俵は四角で、さまざまあったのだろう。

室谷 それははじき出すヤツだね。はじき出されたカードは自分のものになって、うまい人はそのように自分の財産を増やしていく。丸を描いた土俵のなかでは何人でやるのか。

棟方 複数だが、2~3人が順ぐり、順ぐりやっていく。多いと順番がなかなか来ないから面白くない。それからひっくり返すのもあった。

徳差 それ、ひっくり返すのがビッタの原点だ。そしてはじき出すのになっていく。大きいビッタだと相手のものをひっくり返すのが

楽だが、これ失敗するとその大きいピツタを相手の小さいピツタでひっくり返されて取られるかも知れない。出来るだけ小さいピツタで相手をひっくり返した方が良い。これは土俵の中でやる。

室 谷 仮にいま、徳差さんが棟方さんと勝負をしたら、大中小のピツタを何枚持っていくか。

徳 差 相手が強いかどうかで決まるが、棟方の場合だと7~8枚、大は1枚、あとは中くらいと小さいもの。大きいのはデカと呼んだ。

工 藤 昔のは、武者絵が多かった。

棟 方 ねぶた絵とか凧絵と同じようなもの。

徳 差 三銃士だとか、流行っていた物語の主人公もあつた。

五十嵐(正) 時代を反映して兵隊の絵もあつた。

扇 野 私たちの頃は、少女マンガからの絵もありました。

棟 方 オレは箱のなかにかなり持っていた。戦場(遊び)に行くときはポケットに数枚潜ませて行った。

室 谷 徳差さん、二人で勝負するしたら、どのように攻めていく?

徳 差 丸を描いてジャンケンする。負けた方が土俵の中にピツタを置く。

五十嵐(豊) それ、ジャンケンと言わないでキュツキュと言っただろう。

扇 野 蟹田ではシュツシュと言っていました。シュツシュをやって決めました。

五十嵐(豊) キュツキュはジャンケンとは勝ち負けは逆、石とハサミは、石が勝つんでなくてハサミが勝ったことになる。

石郷岡 少し前、ラジオでジャンケンを各地で、どのように呼び、どのように遊ぶかの話題を放送していました。そのときキュツキュを思い出しくなりました。呼び名は異なっていましたが、キュツキュ(勝ち負けが逆)と同じ勝敗をつけるルールがあるって言っていました。私の周りでは、まずジャンケンにするかキュツキュにするかを決めてから勝負しました。

室 谷 皆さんの話では、青森近辺ではキュツキュで、蟹田は(青森から)そんなに離れていないのにシュツシュとは面白い。全国各地でも色々なやりかたがあるんですね。ここでピツタについて、実演してもらいましょう。棟方さんは負けたとしてピツタを1枚出すね。

棟 方 そう、とにかく大きいのは使いたくない。小さいのを置く。もしオレから攻めるとすれば、徳差がこれ位のピツタを置いたとすれば、それより小さいのでやる。それを飛ばして取る。ここ(ポケット)に何枚もたまっていく。ピツタを取るために置かれているところの傾斜とかをちゃんと考えてやる。オレの場合は、相手のピツタを見ながら自分のピツタの端を折り曲げる。そのようにするとひっくり返す確率と飛ばす確率が高くなる。

五十嵐(正) まったく平だとうまくいかない。端のところをちよつと折る。ここが微妙だ。

徳 差 それは、相手ののを土俵から出すためでしょう。

五十嵐(正) 出すのもひっくり返すのも両方だ。そのとき体全体で風を起こせばもっと効果的になる。

徳 差 種類があるんです。今のは円の外に飛ばすルールの遊び。それから円の中でひっくり返す遊び。それと先つちよをツメのように折る、相手も折っておかなければならない。それでぶつけて出してやる。今、考えると3種類あつた。

五十嵐(豊) ピツタを相手のピツタにもぐらすというのもあつた。相手の下にもぐらせれば勝ち。

徳 差 このようにルールが違うから、町中の棟方とジャイゴのオレと勝負してもルールが違うのでダメだ。

室 谷 それじゃ、徳差さん、架空の相手がそこにいるとしてやってください。

工 藤 室谷さん、なかなか大変だ。もぐらせるやつと、ひっくり返すのと、放り出すの、折り曲げてツバ(刀の鐔の意)を付けるのと4つあった。

五十嵐(正) さらに着ているものを揺り動かして風を出すのもある。

徳 差 それはインチキでしょう。

棟 方 ずるいやり方で、本当は違反なんです。

徳 差 それではやりましょう。円のなかに相手が置いたら、そのビッタのどこにやれば空気がうまく起こせるか、判断しなければならない。

——— ここで、徳差さんが立ち上がって、手振り身振りで筒井のビッタ遊びを披露した。

室 谷 ここで同じ昔には変わらないんですが、一番若い石郷岡さんの頃はどうでした？

石郷岡 私の小さい頃(昭和30年代)もビッタとパッコをしていました。ビッタは、皆さんと同様の丸い厚紙を使った遊び。パッコは、四角い札(5~6×2~3センチ程度)を使い、相手の札を息でひっくり返す遊びです。卓上で行うので、季節を問わず室内の遊びでした。ビッタとパッコは明確に区別されていました。絵柄は、鉄腕アトムや鉄人28号などのアニメキ・キャラクターが多かったですね。

5寸釘でクギ打ち

室 谷 待ちに待った春で、土の上でビッタから始まったが、小山内さんはどうでしたか？

小山内 5寸クギを打って遊ぶ、4~5人でやるんだが、アレって今思うと、何が面白いのか。

徳 差 国盗りの遊びで相手のクギを飛ばしたりして面白い。勝った方はそのクギを取って集めていく。

五十嵐(正) せまい所にクギをキチンと刺さなければならないので、なかなか難しい。

徳 差 さっきのビッタのようにキュッキュで順番を決める。相手のクギが刺さっていて、それにぶっつける。相手のクギを倒して自分のクギが(土に)刺されれば勝ちで相手のクギを没収する。もうひとつ(のルール)、倒れている相手のクギに自分のクギを打ってカーンと鳴って(音がして)自分のクギが立てば勝ち。

五十嵐(豊) 前の冬(の座談会)で出たコゲとルールは一緒だよ。

工 藤 一番、大きいクギで、大きくないとやり甲斐がないし、投げられない。

小山内 あのクギ、どっから手に入れたのか今、考えるとソレ分からないね。

工 藤 ウチにあったんでないですか。錆びたヤツだとか。倒すのと、はじくのが快感でやっていた。

徳 差 我々はガラス玉ではじくのもやった。

棟 方 はじく遊びはかなり範囲が広い。貝ガラでもやったし。

五十嵐(豊) 5寸クギでは国盗りもあった。相手と打ち合って相手が逃げられないようにしていく。これは腕が必要だ。1センチほどしかない所の中(クギとクギの間)に立てていかなければならない。

棟 方 あれは軍国主義のひとつになるね。

五十嵐(豊) 戦中でしたか。戦後はやらなかった？

工 藤 私も覚えています。自分たちはそんなにやらなかったが、やっている所は見た。

石郷岡 私はヘタツピ(下手)だったので、あまり遊んでいません。周りでは、ちょっとした休み時間に遊ぶ人たちもいました。陣取り(国盗りと同じ?)が多かった様です。

——— これは(工藤、石郷岡さんの場合)昭和30年代のことで、戦後でも名残はまだあったことになる。

缶蹴りはカクレンボの変形

室 谷 つぎに缶ケリにいきましょうか。

棟 方 缶は長目のものを使った。ミカンとかジュースの長いのがあったね。これは音がカンカンと出る。缶のころぶ音が聞こえてくる。タスケってあるでしょう、目隠しをしてやる。その(カクレンボ)、1種ですよ。

山 道 ルールはどうなんですか。

棟 方 道路というか、路地のほぼ中央に缶を立てて置く。鬼は目隠しして電柱とかに体を寄せている。

工 藤 周りに5、6人の子どもたちがいて、そのうちの誰かがその缶を蹴る。(鬼が)できるだけ分からない(探せない)ようなところにけっ飛ばす。鬼が目隠しをとって蹴られた缶を探し拾いにいく。目隠しだが、目を隠さないで手で目をおさえるとか、または電柱がなくても家の壁とかに顔をつけて見えないようにしている。

扇 野 鬼は缶がどこに蹴られたか分からないし、探しにくいところに蹴られているから、なかなか見つからない。その間に周りの人は逃げて隠れてしまう。鬼は缶を見つけて、今度は隠れた人を探す。カクレンボですね。

工 藤 最初の始まりのところですが、これもキュッキュをやって負けた人が鬼になって、勝った人が缶を蹴るんです。

五十嵐(正) 最近のカクレンボだと“もういいかい”と言って、隠れた人は“もういいよ”と言うでしょう。鬼はそれから探しに行く。その代わりに缶をけっ飛ばすんです。カクレンボの変形です。

工 藤 下手なヤツがけっ飛ばせば、すぐ見つかってしまう。見つかった(見つけられた)人はつぎの鬼になる。

山 道 私の記憶では何人かが連なって……。

扇 野 それはタスケでしょう。助けるの助けです。私たちがやったタスケは、近所の子どもたち7~8人がキュッキュして負けた人が鬼。他の人は逃げ回るんですが鬼に触られたひとは手をつながされていくんです。周りで逃げ回っている人は、つながった人の手に触ると助けたことになる。鬼はとにかく一人でも多く触ってつないでいく。この繰り返してつながった人がいなくなると鬼の負けです。

石郷岡 缶ケリやタスケも遊びましたが、タスケの方が多かったです。近所の広場といえば善知鳥神社の境内(現在の駐車場になっている場所)ぐらいしかなく、蹴飛ばした缶はどこにあるか一目瞭然。タスケだと広く平坦な場所があれば、支障なく遊べました。

工 藤 さっきの缶ケリだが、反則などもあったね。道路だから両側にドブ(下水)があるでしょう。そのドブのなかに缶を蹴ったりする。

五十嵐(正) 隠れる人は、住宅がずっと連なっているから、そのうしろとかに逃げ回る。他人の家であろうがそこに入ったりして。

棟方 道路も広くない。汚い側溝があつてそこに落ちたのを拾うんだから。工藤さんが言ったようにドブなんですよ。大体、水道なんてまだない。オレところには、たまたま水道があつたけど、多くの方は公衆水道に水を汲みに行っていた。公衆水道は屋根があつたから、ワラハド(児童)はそこに集まってよく遊びの相談をしていた。

小山内 側溝には流し(台所)の水が全部、流れていくんだから不衛生きわまりない。

棟方 そう、台所をメンジャとも言つたけど、そこから流れていく。ドブとか、その近くにはミミズがいっぱいいる。

徳差 メンジャと言っても今の人は、誰も絶対わからない。明治生まれのオヤジから、メンジャというのは何だつて聞いた。洗面所でしょう、その面所から津軽弁のメンジャになまっている。そのように自分は理解している。

石郷岡 私の親の世代ではミンジャと言っていました。微妙な地域差かもしれません。

室谷 ミンジャとかメンジャというのは家の北側にあつて、そこは日当たりが悪いから冷たくてモノが腐らない。流しからモノを洗ったりした水が、外のドブに流れていく。

棟方 いやそうじゃない。すぐ下の外にはカメがあつてそこに流れていく。これは液肥のようなものになる。近くに畑があるからそれにかけてやる。

室谷 トイレなどもカグジ(家の裏の畑など)に近い、家のうしろに作つてある。人糞はすぐ肥料として利用できるよになつていく。藁などを積み重ねてそれにかけて堆肥にしたりする。

棟方 肥やしダメ(溜め)があつて、それによく落ちたもんだ。

徳差 そう、筒井小学校から幸畑に遠足があつて、雪解けのころでまだ山には雪が残っていて、畑のところにはタメが、人糞を溜める所があつた。オレ、それに落ちてしまった。すぐ近くの川に入ってズボンを使った。臭くて臭くて、先生に何も言わないで(家に)帰つてしまった。ジャイゴだからズボンが何本もあるわけないし、そのあと大変だった。

棟方 そういう所に落ちるから、大きくなって(成長して)いくんだよ。

徳差 その遠足ですが、今度は別の遠足のとき、あの3つに分かれた実があるでしょう。何と云うんですか、道路端によく生えている。

五十嵐(正) ハシバミでしょう。細いトゲが付いている。

徳差 ソレ、割つて食べるとおいしい。いっぱいあるところを知つていて、遠足のときそれを食べようとした。すると先生から、そういうことは遠足ではペナルティーで家に帰されてしまった。遠足というものの目的は何だつたのか、今でも分からない。

棟方 その実、ツノハシバミで、あれは確かにおいしい。クルミよりおいしい。

ビー玉は、玉っこ …… ビッタと同じで子どもの財産

室谷 工藤さんが、さっきビー玉の話をしたんで、それにいきましよう。工藤さん、ビー玉なんて一般に言つた？ 上品すぎませんか。

工藤 玉っこです。あれも何種類かあるね。一つは丸を描いてその中に置いたのをはじく。玉を投げてはじくんです。自分の玉が、円内に残つて、相手の玉が外に出ると自分のものになる。

もう一つは小学校の頃、道路に玉を5発とか10発とかを置いて、勝負する相手がこっちにいる。(並べた)それにぶつつけて出せば、出たのを貰える。周りにはお客さんがいて、こっちには2人、3人と

(勝負する人が)並んでいる。そして玉をぶつつける。これは学校の講堂でやって禁止をくらったけど。朝(学校に)行けばビシッと大々的に遊んでいるので。講堂では(床に)板を張っていて板の目があるが、そこを玉がビューと転んでいって当たる。当たらない玉は全部こっちでいただき。はじけた玉はぶつつけた人が貰える。講堂だと相当の距離だが、道路だと2間というか3~4メートルでしょう。

3つつ目は点と点をはじきながら回っていくのがあった。玉を自分の目につけて、相手の玉に狙いをつける。ビューンと玉を投げて相手のをはじくと貰える。失敗すると今度は相手はそれをはじいていくとか。

五十嵐(正) ゴルフみたいに穴が何カ所かあって、それに入れていくようなもの。穴に入れて、次の穴、最後にゴールの穴に入れて終わり。

工 藤 穴に入れるのもありましたか。玉っこは駄菓子屋に売っていた。縞模様がついたものとか、大きいのと、普通の2種類があった。値段も、高いもの安いもの。

徳 差 その玉っこは私は名手でしたよ。今、ゴルフなどを見ているとずいぶん下手クソだなと。コツは必要だけどやっぱりセンスなんだ。距離感などをいかにつかむか。私は“那須の与一”とよく言われた。相手の玉にぶつつけて取るというルールがあるけれど、丸というか円の中でやるんだけど、その中にお互いに数個ずつという約束ごとがあってそこに置く。キュッキュをやって勝った方から、一定の距離のところ、そんなに遠くない、2~3メートルかな、そこに線を引いてそこからスタートだ。1回で円まで届く場合もあるが、そうもいかない。次の人が打つ。もし自分の玉に当たれば取られてしまう。最初に打った玉です。相手にここで取られれば、スタートから始めなければならない。当てないで円の近くにもってく場合もある。次の人がまたやる。

室 谷 それって(玉を)投げるんですか？

徳 差 いや、打つんです。指で、スッペだね。

棟 方 スッペにも流儀がある。親指と人差し指で打つのと、親指と中指で打つ。オレは中指だ。

徳 差 どっちでもやるが、私は人差し指の方が正確。それで円の中に打って中に入っている玉を外に出す。自分の玉も出なければならない。外に出れば、また円の玉に向かってできる。円の中に入れば(とどまれば)、そこで終わり。相手の人が打っていく。私はこうしていっぱい玉をためていった。

室 谷 その玉はどうするんですか？

徳 差 自分の財産です。玉は買わなければならない。ただ、なくなると青森高校の西北の方にある、人だけ渡る橋があるね。藤聖母園の方へ下りるとガラス工場があった。ガラス工場のところにガラスがいっぱいあって、ビンも混じっていた。そこで、ラムネの玉が落ちていないか探し回った。

工 藤 そうすると、先輩の玉には模様が入っていなかったんだ。オレたちの模様が入っていないのと、中にさまざまな模様があるのがあった。

徳 差 五十玉という大きいのがあった。これだと円の中に置いてある玉をいくらでもはじき出すことができる。力が強いのでなかなか使わないが一つか二つはもっていく。使う場合もあったが、相手に取られる危険があるのであまり使わなかった。

石郷岡 これも私は不得意で、あまり遊んでいません。同級生に非常に得意にしていた人がいて、常にハンディを付けられていた様です。

小山内 その手のルールとかは、どうなんでしょうね。一般の本を見ると絵を描いたりしているが、なかなかリアルには説明できない。

室 谷 北彰介さん、子ども文化の研究家で昔のオモチャッコの本を書いている。その中でさまざまな遊びの種類をあげている。ただ、そのルールというか中身を説明するまでは至っていない。所変わればルールも変わるで、なかなか説明が難しい。

徳 差 確かにそれは難しいと思う。ただ、こういう遊びがありました、で終わってしまう。

ケンケンとタガ回し

室 谷 土の上でさまざまな遊びがあった。扇野さん、土に丸を描いてピョンピョンするのがあったでしょう。石を蹴って。

扇 野 そうそう、丸が一つあって、つぎ二つあって、また一つ、つぎ二つとあって、最後は大きいのを描いた。何個だったかな。

徳 差 ケンケンですか。それ、女の遊び？



図2 ケンケン この挿絵は山口(1975)による。左奥の絵が座談会の内容に当たる。

五十嵐(豊) 丸は10個くらいでないか？

扇 野 丸の大きさは2尺というか50センチくらいで、最後は大きくて1メートルほど。平べったい石を最初の丸に置いて、それを片足で蹴ってつぎの丸、その次ぎの丸と入れていく。右足、左足のどちらでも良いが私は右足でした。

五十嵐(豊) 描いた10個の丸に(順々に)全部いれなければならない。途中で失敗すると、次の人の順番。失敗した人は最初からやっていく。蹴り具合というかコントロールがよくないとなかなか難しい。

扇 野 何人でもできるけど順番待ちが長いとだめなので、3、4人が集まればやりました。脚力も必要で結構大変でした。ケンケンと呼びましたね。

石郷岡 女の子が良く遊んでいました。妹のつきあいで、何度か遊んでいます。女の子の遊びといえば、ゴム跳びがはやっていました。二人で両端を持った長いゴム紐を使い、一定のルールで飛び越



写真3 土に絵を描く 青森市高田の実家の庭で妹・弟が遊んでいた。(室谷撮影、1958年春)

える遊びです。膝の高さでは何々跳び、腰の高さでは何々跳び、肩の高さでは何々跳びなどがあったと思いますが、詳しくは覚えていません。

室 谷 それから、我々のあの頃は紙だってあまりなかったのですね。春先に土が出てくればそこに絵を描く(写真3)。棟方さんいかがですか？

棟 方 やりました、やりました。5寸クギで絵を描く。あれも遊びです。

五十嵐(豊) だから、何でもクギ1本あれば、どんな遊びもできた。金で買う道具などいらない。

徳 差 タガ回しに入りましょうか。

棟 方 タガ回しは、本当の樽の竹のタガを使った。その

次はタライのまわりの針金、それから……。

工 藤 自転車のリムでもやったでしょう。

徳 差 樽のタガがないとき、色々なものを使うんだけど。

五十嵐(正) タガに合うような棒を見つけてきて
押して回していく。

工 藤 ゴルフのパターみたいな形で、棒の場合
もあるし私たちは針金だった。ジャツパ木で作ると
きもあったけど。

五十嵐(豊) 先っちょをT字形にした木の棒を
使ったりした。

徳 差 針金のタガを回すときは、手で持つ棒の
方にクギを打ってタガをそこに合わせながら右、左
と自由にコントロールしてやった。シャー、シャー、

シャーと音がして気分が良かった。金属と金属だから、なかなか良い音がする。Uターンするとかバックするとか、これもコツがあったね。

室 谷 勝ち負けは？

棟 方 それ、あまりないけど、2人で並んでやりながらいかにスムーズに先に行き着くかということも
あった。複数になれば、人は必ず競争心が出てくる。遊びには常に競争心が伴いますね。



図3 タガ回し 山口氏原図(1975)。

クモの巣で昆虫採集

棟 方 それから、これは遊びになるかどうかだが、昆虫採集で是非、記録しておきたい。これ網で
なく、クモの巣を使ったんです。

小山内 そうそう、ハチの巣を採ったりした。

棟 方 あれ懐かしい。昔、軒下にクモの巣がいっぱいあった。棒の先に輪っかを付けて、それにク
モの巣を何枚も付けた。オレはオヤジの竹サオを借りてきて、その先っちょにクモの巣、それで何でも
採った。

室 谷 何でもというけども、主にトンボでしょう。

小山内 私が採ったのはハチの巣、アシナガバチの巣。危ないから遙かかなたにある、それくらい離
れて棒を差し伸べて採る。新城にいたときで、国民学校の2年生。ハチの巣を落とすんだ。そのあとに
人が通ってくるが、連中はそのことを知らないから面白い。ブンブンとハチが飛び回っている。こっちはもう逃げたしまっている。

室 谷 それで、ほかの人が刺されたとかは？

小山内 何回もあったね。こっちは知らんふりを決めこんでいる。それで見つかって怒られた、なん
という事はなかった。

棟 方 クモの巣で採る、今でも目に浮かんでくる。戦争中の小学生のときだった。オニヤンマなど
相当大きいトンボも採れた。シオカラトンボぐらいだと簡単、チョウの場合は粉が取れてしまうのであ
まりやらなかった。クモの巣でいかにネットの棒を作るかがコツだ。

五十嵐(正) あれは夕方ですね。夕方になるとオニグモが糸を張る。タテ糸ですね。そしてヨコ糸。

タテ糸にはネバネバが付いていない。ヨコの糸に粘球が付いている。腹部の末端にイボイボがあつて粘球を出すイボとネバネバを出さないイボがある。その張ったばかりの巣をかすめ取る。

棟方 だから、(ネバネバのない糸を)クモは自由に歩ける。

マギリ(小刀)で遊び道具を作る

室谷 まだ土の遊びから、そんなにほかの遊びにいいません。急がないと……。

棟方 遊びなんてもう、100種類でできないでしょう。

室谷 春が進むと草木が芽生える。そういう草木を使った遊び。雪解けの水が流れ、岸边にはオニグルミの若いすると伸びた枝がありますね。それを15センチくらいに切って、あれは皮と芯(木質)がすぽっと抜けるでしょう。長い方には底を付けて、短い方はふたにする。

工藤 中に塩を入れて赤くするやつですか？

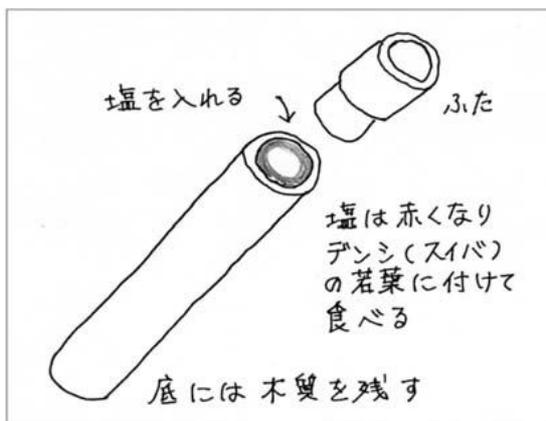


図4 オニグルミの枝で作った塩入れ

室谷 そう、やったでしょう。塩を入れると赤味を帯びてきて、田畑の畦にはスイバとかギシギシの若葉が出てきている。これ正式な名前はスカンコとかスカンボと言った。酸っぱい酸味のあるやつ。

徳差 デンシでしょう。

室谷 そう、思い出した。そのデンシです。オニグルミの筒に塩を入れて持ち歩いた。デンシに塩を付けて食べる。子ども達のオヤツですね。

工藤 オレたちも塩を入れて持ち歩いた。赤くなった塩をただなめるんだ。やがて学校で禁止をくらった。



写真4 オニグルミの若い枝(右側)

棟方 オニグルミをすぽっと抜く、あれ気持ちいいね。塩よりも砂糖を入れるんだ。

徳差 棟方さん、砂糖というのはないでしょう。それはない。

室谷 甘いってば、サッカリンの時代でしょう。

工藤 サッカリンは懐かしい。

棟方 砂糖もピンクになるんです。うちの叔父さんは特需というか闇屋をやっていた。オレは軽蔑していたが、叔父さんに招待されるとオヤジもオレも渋々ついて行く。ご馳走にあずかるんです。

室谷 マギリってわかるね。小刀というか小さなナイフですね。世の中がいくら豊かになった頃、あのマギリを使うのを禁止した。あれは間違いの始まりですね。子ども達は、あのマギリでさまざまなことを手作りやりました。オニグルミの枝を加工したり。

徳差 扇野さん、マギリって分かりますか？



写真5 スイバ 田舎ではデンシと呼んだ。

扇 野 分かります。

石郷岡 小学校の頃は、「切り出し小刀・カミソリの刃に持ち手を付けた物」などを総称してマギリとっていました。鉛筆を削るため、当初は持ち込み自由でしたが、鉛筆削り機が教室に導入されてから禁止。

棟 方 これ、非常に大事なことです。子ども達から刃物を取り上げたのは大間違いです。今でも、ノルウェーなんかでは、小さいときから刃物を使わせている。

小山内 この前、ドイツに行ってきたが子ども達が刃物で作っている。あの頃はマギリで子どもが傷をつけあったということはなかった。

室 谷 仮に間違っただけで傷をつけても、そこで痛いとか血が出るということが分かる。そこから命とか注意力が生まれていく。

工 藤 鉛筆を削るとき、しょっちゅう手に傷をつけていた。

石郷岡 切れない刃物は、かえって危険。余計な力を使うため思わぬ怪我をしまいます。子ども達へは小さい頃から良く切れる刃物を与え、安全な使い方をつきつきりで教える。半年もすると刃物を持たせても怪我をしない・させない様になるんです。

線路に5寸クギ…… ナイフを手作り

五十嵐(豊) 悪い遊びかも知れないが、うちの近くに線路があってそこに5寸クギを置く。列車が通ればピンという音がして平たくなっている。それを研いで切れるようにした。

室 谷 それ、もう時効ですからもう少し詳しく話してください。

五十嵐(豊) 遊びではないかも知れないが、そういうことでナイフを作ったということ。

棟 方 そっちは古川で、こっちは長島。長島の方が文化が先です。長島は古いから文化が早いんです。まずね、東北本線でそれをやるか貨物線でやるか、5寸クギを。

五十嵐(正) 低速の貨物列車だとピシッと平たくなる。高速(東北本線の客車の方)だとピンとってそんなに平らにならない。中途半端です。

棟 方 そう、貨物の線路の方が良い。

徳 差 筒井では、それ10円玉でやって見た。当時、筒井そのものには線路がないから浜田の方、今のジャスコに近いところに行った。線路の上に上げておいて汽車が通るのを待っていたが、何も潰れなかった。それであきらめた。

五十嵐(正) 新幹線だと潰れないね。パーツと吹っ飛んでしまっただけ、それっきり。

室 谷 とんでもない。そんなの今やると全国ニュースですよ。

工 藤 今の話のつづきで、五十嵐先輩、古川小学校の横を川が流れている。春先に雪解け水で木が流れてきますね。ジャツパ木とかいっばい流れてきた。それを橋の上から5寸クギの刃を付けた槍をビューンと投げる、その木を引き上げて遊びましたが。

五十嵐(正) ちょっと記憶がないね。船を作って糸を結んで流したことがある。横に可動の板を付けて潜水させたりして遊んだ。工藤さんの所はどこでしたか。

工 藤 旭町通りの古川2丁目だから、旧線路通りからちょっと国道寄りです。

室 谷 ここでは5人が町中というか都会で、(互いに)住んでいるところが近い。ところがさっき長島の方が古川より文化が先と言った。これに(古川の人は)何か反論がありませんか？

棟方 昔の話だけど、古川小学校が焼けて(生徒が)長島小学校で一緒になったときがあった。そのときこの人たち気の毒だなと思った。そのとき古川の田向さんと友達になったけど。

五十嵐(豊) 古川小は私が4年生のとき空襲で焼けた。オレは板柳の沿川に疎開していて、帰ってきたときは学校はちゃんと出来ていた。別に長島小に世話にならなかった。ゴザ敷いてミカン箱みたいなもので勉強をした。近くの焼けた学校から子ども達が集まってきて150人くらいのクラスになった。当時は1クラスが5~60人だったから3倍ということになる。自分のスペースがミカン箱ひとつ分で、文化の違いなどは思いつかないね。

棟方 具体的にどれがどうこうではないが、周りでなんとなく言われていた事は確か。理由は分かりません。

五十嵐(豊) 旧線路があって、それより北の方が開けていたということかな。古川の方は山手(南)にあったし、長島はいくらか中心部の方に近く、そうだったのか。

徳差 青森は安方から始まって、つぎに新しく出来た町が新町ということ。そして長島は長い島と書いて、そのような形が由来で出来た町。言ってみれば新町から見れば長島はジャイゴです。(大笑い)

現代の遊び、あれは機械・商品に遊ばれている

小山内 遊びというのは地域地域で色んなルールがあって、都会の方でこういう遊びがあれば津軽半島の竜飛あたりにもすぐ入ってくる。ピツタでも何でも。歴史的に見ると地域の独特の遊びとハヤリの遊びとか、そういうものが混交していく。高田だって古くから色々なのがあった。今日の座談会はそういう意味でも非常に面白い。

棟方 前の座談会ではホモ・サピエンスでなくてホモ・ルーデンス(遊びは人間の本性。本誌前号14ページ参照)と言った。まったくこれ然りで、遊びをそういう点からも見直す必要がある。遊びは文化の原点。遊びのなかにこそ人間の根源がある。今日のこれは一部始終記録しておく価値がある。歴史の証言という意味でも会報に残していく。そうでないと消えていくでしょう。

小山内 今の子どもの遊びというのは、本当を言えば遊びではないわけ。機械に遊ばれている、商品に遊ばれている、資本に遊ばれている。

棟方 非常に悲しいこと。

小山内 ピカピカのゲームソフト、悲しいではないか。あのようなソフトを持っていないとダメなんですか。子どもだけでなく、成人・大人たちも、どこでもピピピピっと。いやあ、この前東京に行ってきて電車の座席に座ると殆どの人が、スマートホンなどをやっている。

室谷 それ東京だからではない、青森~弘前間の電車内でもバスの中でも、殆どが手に持ってやっている。異様、異常です。

工藤 ウチの社員も会社の休み時間にあれをやっている。ご飯を食べたあとやっている。

徳差 何をやっている？

工藤 ゲーム。

徳差 そうすれば自転車に乗ってやっているのもゲームですか？

扇野 あれはメールです。

室谷 あのメール、若者の間では着いてから何分以内に返事を出さなければダメ、という決まりが

あるらしい。

工 藤 すぐ来ないと、あの人、わたしを嫌っているとか。

徳 差 ハアア、クギ刺しなんてなんだっけ!

小山内 いや遊びの現代的なメールやゲームに遊ばれているんだ。

工 藤 そう、あれは仕掛けられている、金儲けのために。

徳 差 オレなんか田舎にいて、野山で野山を相手に遊んで一日が暮れていくんですから。その中で体も鍛えられていく。虫、カエルをどうこうして、いま思えばずいぶん残酷なことをしたと思うが、それが大人になって命の大切さとか、そういうものに繋がっていく。

ジンタの実(ヒョウタンボク)で竹テッポウ

室 谷 さっき、マギリの話をしました、ササですね、枝に穴が開いている。これにジンタというのを詰めて棒で押すとポンと音がして飛んでいく。ジンタって木の実、クスリの仁丹に似ているので、こう呼んだ。

棟 方 やったやった、それテッポウですよ。ジンタだね。

五十嵐(豊) 紙を口の中でクツチャクツチャやって丸めて、その実は町にはないから、紙を詰めて打った。

室 谷 ジンタって言うのはヒョウタンボクの実です。田畑とか小川の周りにいくらでもあって、白い花が咲く、そして青い堅い実になり、熟れると赤くなる。おいしそうだが食べられないと教えられた。

棟 方 花が白いんですがやがて黄色になる、金と銀になるからキンギンボクともいう。

徳 差 私もやったが、ヒョウタンボクとかキンギンボクとは知らなかった。

五十嵐(豊) その名前、棟方は昔から覚えていたのではなくて最近、覚えたんでしょう。

五十嵐(正) ウチの近くにもありました。

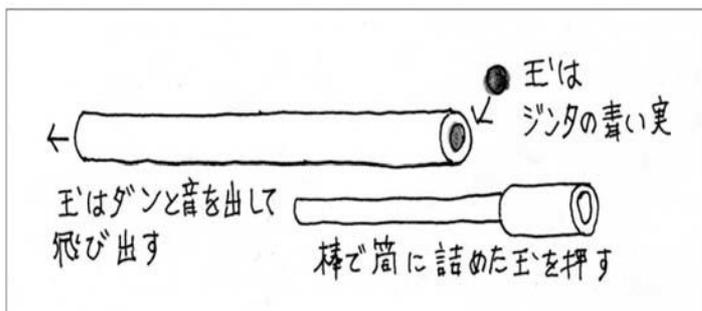


図5 竹テッポウ マギリ(小刀)で作る。



写真6 ヒョウタンボク 中央が実。

工 藤 そこはジャイゴだからでしょう。

棟 方 あんた達、ちょっと町の真ん中に近いからってそう言うけど、ちょっと50メートル、100メートル違うだけで大違いになるんだ。

工 藤 先輩ところもジャイゴでしょう。水まわし(洪水)などになるから。

小山内 私、高田にいたとき、父が小学校の校長で住宅が校舎と廊下で繋がってあった。あるとき、朝、急に水が家の中に入ってきて全部水浸しになってしまった。

室 谷 高田でもあの辺は低くて、雪解けのときはそうなるんでしょう。

小山内 その水で牧野(富太郎)の図鑑だとか大事なものが全部使い物にならなくなってしまった。

小学4年生のときだった。

五十嵐(正) 荒川が氾濫したんですか。

小山内 あの大きい川ではなくて、すぐ近くを小さい川が流れていた。目がさめて5時頃、畳がプカプカ浮かんでいて。トイレにも水で家中が汚い水だらけになってしまった。

室 谷 高田には東側を大きい荒川があって、村中を小さい前川(まえがわ)というのが流れて、さらに西を外堀のように後川(うしろがわ)が囲んでいる。その西の田圃の中を入内川が青森方向に流れている。前川は村人がダイコンとか野菜を洗ったり、洗濯したりで、水はキレイだったからハグロトンボなどがウジャウジャ飛んでいた。

表1 棟方少年の記憶に残る遊び(春～秋)			
かくれんぼ	ニラメッコ	オシクラマンジュウ	助け(手つなぎ)
なんじょ(なぞなぞ)	しりと	じゃんけん	ダルマさん転んだ
騎馬戦	相撲(バリエーション)	縄跳び	竹とんぼ
けんだま	ドッジボール	ブランコ(ターザン)	たこ揚げ
砂・土遊び	竹馬	輪回し(タガ回し)	いちよこ
缶踏み	びった(メンコ)	カード遊び	折り紙
影絵遊び	日光写真	ハーモニカ	木登り
パチンコ・石弓	なんご(小石数当て)	花遊び(タンポポ綿飛ばし、首輪)	
虫取り(蜘蛛の巣・ホタル・イナゴ)			
船・筏遊び(春先洪水時)	水浴び(海 貝採り)	水浴び(川・魚手づかみ)	ヤス突き
魚採り(釣り・かぐ)	船遊び(ほかけ、樟脳)	石投げ(水切り)	
各種工作(隠れ家・小屋) 悪戯(チカラシバ罫・乾燥山菜に水、偽ラブレター)			
模型飛行機	紙飛行機	ゴム原動力飛行機	

石弓で寒スズメを百発百中!

棟 方 とにかく遊びは沢山あるんだ。項目だけでもあげておきましょう。思い出して書いてきました。(表1)

室 谷 これ大変参考になる。多すぎてとてもじゃないけど座談会で全部やるとなると何百ページにもなってしまう。

棟 方 この中で、どれを優先するかと言えばパチンコ、今のパチンコでなくて石弓です。西部劇でないけど、オレは百発百中でスズメを落とした。

五十嵐(豊) 二股の木の枝にゴムを付けて。

棟 方 そう、その二股の木に何を使うかですよ。これはオニグルミだったと思う。一番大事なのはゴム、オレの場合は自転車のチューブを使った。チューブを適当に切って木の2箇所結びつけて石を受けるところには皮を使った。

徳 差 オレたちは、カラスが来るもんだからずいぶんそれでぼったくった(追い払った)。

棟 方 寒スズメが近くの大きい柿の木に集まってくる。12月から1月だね。百発百中で。向かえにオレを可愛がってくれた日通に通っている若者が、当時オート三輪車ですか三輪トラックですか、あれを運転していた。その人に採ったスズメを差し上げた。スズメ焼きにしたんでしょう。とにかく(石弓

は)手応えがあり、(スズメが)パツと落ちるんだ。

室 谷 (弾丸の)石はどこで調達したんですか。

棟 方 石ではない、これは私の工夫で鉛を使った。すぐ近くに操車場があるでしょう。当時、オレたちは小遣いがないから、アカ、銅ですね、朝鮮動乱でずいぶん高く売れた時代でしたね。それをずいぶん集めたが、青操(青森操車場)に行くとバッテリーがあつて、それに鉛を使っていた。切つて玉(弾丸)になるようにして使う。重みがあるし、石と違って命中率がすごい。抵抗がないから狙った通りに当たったんです。あのスズメ、ずいぶん可愛そうなことをした。

徳 差 スズメは近くに行つても逃げないし、短距離だったから良かったのかも知れない。

室 谷 これ、棟方さんの立地条件が良いからで、普通は鉛の玉なんて使えないよね。

工 藤 私らは針金をペンチで切つてU字形にして、ペンチで切つたところがとがるでしょう。小さい、電気工事に使うステップルみたいな形にするんです。これは回りながら飛んでいって刺さるから、なかなかのものだった。道路は舗装して石がなかった。

室 谷 所変われば品変わるだね。我々の田舎ではやっぱり小石ですね。その後、空気銃がはやってきたでしょう。お金のある大人があつてスズメを打っていた。もう太刀打ちできないので、(石弓は)だんだん廃れていったような気がする。



図6 石弓 山口氏原図(1975)。

扇 野 遊びなんですけど、私は蟹田でした。さっき棟方さんから出なかった女の子の遊びをいくつか思い出しました。ゴム飛びとか、ガツケ、まりつき、お母さんごっこ、海でウルメ採りとか砂鉄取りなど。お母さんごっこは分かりますね、ままごと遊びです。ゴム飛びなんかは童べ歌に合わせて、「日露戦争に勝った」とかの歌です。目の前がすぐ海でウルメっていうんですか、小魚がいっぱいいました。二人で手ぬぐいを伸ばしていっぱいすくいました。すぐ砂浜があつて磁石で砂をグジャグジャやると砂鉄がいっぱい付いてくる。取った砂鉄の上とかに磁石を近づけると動きますね。あれは不思議で楽しかった。

石郷岡 さっきのテッポウとか石弓ですが、私の頃は既製品が主になりました。地域環境もあるのですが、竹などの素材が周りになく、竹テッポウを手作りする事はなかったです。ただ、竹の代わりに細長い筒状の何かが手に入った場合、割り箸などを使って作った事もあります。石弓は、周りの何人かは遊んでいましたが、安心して飛ばす場所が少なく、メジャーではなかったと記憶しています。

川ガニ、ナマズ捕り

川ガニ、ナマズ捕り

小山内 高田の小学校にいたあたりは、講堂の中で生徒たちがみんなでボゴリッコとかをやったでしょう。一人が立っていて、次ぎつぎと……。

工 藤 それ、”馬っこ”だ、何人もしてやる。

小山内 飛んだり跳ねたり、ああいう”馬っこ”は寒いときなど毎日の遊びだった。股に頭を入れて、

その上をジャンプしたり。そういう遊びは今は、小学校なんかでは危険だからと消えてしまった。あれで怪我をした、という話は聞かない。

棟方 我々は10何人も(連なって)並ぶんですよ。一番最初の人は何人飛べるかなんだ。多くは真ん中辺でとまってしまった。

工藤 そう、それで股に頭を入れて並んでいる人は大変だった。(中間が)段々重くなって行って最後は潰されてしまう。潰れれば負けだからね。

棟方 アレで足腰が強くなっていくんだ。

工藤 講堂の中だけでなく、廊下でもやりましたね。

五十嵐(豊) 話を戻して、川を(せき)止めてやる、アレなんだっけ?

棟方 カ(搔)クというんだ。

五十嵐(豊) 川をせき止めて、その間に入っている水を搔き出すんだ。田圃の堰なんかでよくやった。

棟方 これで魚なんかを捕るんだが、農家の人にもものすごく怒られる。そのままにしないで復旧しても怒られる。

五十嵐(豊) 堰があって、その辺の土をとってきてせき止めるから、田圃を壊してしまうことになる。

徳差 オレたちの場合は、(筒井)中学校の横を通っている藤兵衛堰があるでしょう。上流の合子沢川とが合流したあたりでせき止めて年2回、“草上げ”というのをやるんです。水草が溜まってしまって流れが悪くなるから。村人というか受益者が集まってきて一斉に鎌を持ってきてやる。水を止める。このときがチャンスなんだ。ナマズ、フナ、それにカワガニです、何て言ったかな。

山道 モクズガニです。

徳差 モクズガニが岸の穴に潜って入っている。それを採るんだ。季節は春が過ぎた6、7月と田圃の稲を刈り取る前の9月初めのころ。そのあとはマスが上がってきたりする。

室谷 この辺の川には、荒川とか駒込川は毒水でダメだが、どこでもナマズとかモクズガニがいた。カニはこんな大きい、直径7、80cmの鍋にいっぱい入れてゆでると真っ赤になる。それをオヤツがわりに食べたが、私はあまりおいしいとは思わなかった。季節は、いつだったかな?

徳差 モクズガニは野内川の方によく採りにいきました。野内駅の近くで上北鉱山から索道で Gondola みたいのが来ていたでしょう。あの辺の小さい川というか堰です。そこでタコ網というのとサラ網というので採る。稲を刈って乾燥するとき曲げて使う竹で、それに糸を張って作るんです。タコ網はその中にイワシかなんかを入れておく。サラ網にも真ん中にイワシをおく。イワシは大衆魚で余るほどあったから。この網を川底に置いて歩く。それを順ぐり順ぐり見て歩く。サラ網にはカニが上がっているし、タコ網にも引きずっていくと入っている。それを煮て食べるんだ。あれはおいしかった。

五十嵐(正) モクズガニは上海ガニと近縁で、カニとしては味が良い方に入る。

工藤 前に関(晴民)さんに頼まれて、私の後輩に当たるんです。あの人は釣りが好きで山で会ったんです。モクズガニが食いたいな、と。十三湖の方にはまだいるんで、知り合いにそこから送って貰って関さんに届けたことがあった。昔は、古川にもいたんですよ。

棟方 オレの家の裏を流れる川にもカニはいた。捨てられた缶詰の空き缶にはほとんど入っていた。カニだけでなくナマズも行列して泳いでいた。ハグロトンボがすいすい飛んでいて……。現在は想像もつかない

五十嵐(正) 我が家では春の雪解け水が取まったころ、朝早く岸にモクズガニが流れの暖かいところにたむろしていた。下りて行ってそれを採った。ただし、食べさせて貰ったことはなかった。全部、ニワトリの餌にしたんです。



図7 今純三「青森県画譜」(1934)の第55集「コドモ風俗に関するいろいろ—青森—」の部分。小川の魚捕り、タガ回し、縄とび、などさまざまな遊びが描かれている。

五十嵐(豊) あれ、何で食べさせてくれなかったのかな。色が汚いからかな。

五十嵐(正) あれは寄生虫が付いているから、ということではなかったかな。

工藤 その頃は、我々は海から上がるカニがいっぱいあったので川ガニは食べなかった。

徳差 室谷さんが、季節はいつといったが、やはり夏前だったと思う。そのあと脱皮して、モチ(餅)ガニと呼んだ。あれは食べないで放してやった。

五十嵐(正) 沖館川、(旧)営林局の裏手で森林軌道

の橋があって、橋の上からサラ網にホツケの頭を餌にして下ろしてやった。5~6匹入ってきてそれを素早く上げて捕った。

徳差 それから濁り水のとときにイワシを付けてやると、イワシが光るのでよく集まって来たんじゃないか。最高の収穫だった。やっぱりジャイゴは良い。

室谷 縄文時代を思わせるね。

棟方 いまも青森は縄文、縄文人ですよ。

五十嵐(正) 今でも沖館川のところに行くとかニは採れると思うよ。今は誰もやっていないが。

室谷 ウーン、カニは岸の土の中に穴をあけてそこに住んでいる。コンクリートなどで固められると巣作りが難しくなる。ナマズなんか土に穴を作っていてそれに手を入れて胸のあたりを手づかみする、トゲがあるのでそこをはずして捕まえないと痛い目にあう。

さっき小さい堰をカグって言う話が出たが、私のところはジャイゴで遊びのエリアは今の青森空港あたりまで。沢合いに大谷という集落があって、その田圃の端っこに小さい滝があった。季節はいつだったか忘れたが何人もして滝壺の水を掻き出すんです。するとイワナがウジャウジャと逃げ場をなくして、それを捕ってきて食べる。いま思えば贅沢きわまりない。

水質汚染! 川魚に奇形続出

工藤 沖館川ですが、あすこに放したニジマスに、何か奇形がよく出るようです。

小山内 魚は、ずいぶん奇形が増えたね。

工 藤 新城の方の川で、そこにはアメマスが上がって来るんで友人がよく行った。背骨が曲がって気持ちが悪いって行かなくなった。

室 谷 背骨が曲がっているって、それはいつ頃の話ですか。

工 藤 最近は分かりませんが、10~15年ほど前に友人が言っていた。上流に行けば今度はイワナの奇形が出ると。

五十嵐(正) イワナに奇形が出るのは田圃に使うスミチオンの影響ではないかと思っている。私も何匹か、そんなイワナを釣ったことがある。全部水田地帯で、水田がないところに行くと奇形は出ません。40年ほど前で岩手県の滝沢とか沼宮内のあたりです。

小山内 (奇形に)気が付いたのは私が青森西高校のボート部の顧問をしていたときです。その頃、暇にまかせて堤川で釣りをやって、釣った海の魚も川の魚も背骨が曲がっているのが、ものすごく多かったです。正常なのが少ないくらい、ハゼとかウグイだね。西高校時代だからもう40年前だね。

徳 差 私も同じで、荒川と駒込川の合流点でよく釣ったが背骨が曲がっていた。これはダメだなと、合流点から荒川の200メートルほど南(上流)の橋のところに行って、ここでハゼを釣った。駒込川には魚がないから。

工 藤 それちょっと。三好タクシーってあったね。その社長が釣り仲間で駒込のところではウグイが沢山いたと話してくれた。

棟 方 ウグイだね。ウグイは酸性が強くてもいるから。

工 藤 恐山の宇曾湖にもいるからね。私、30年ほど前に堤川清流対策委員会というのがあってそれに加わっていた。太公望(店名)の社長が(委員会の)会長をしていて誘われた。それで駒込川とか荒川など調べたりした。

室 谷 背骨の曲がっている魚ですが、年代を聞くと10~15年前から40年前ということになる。水田で使う農薬などはずいぶん低農薬化で水質が悪化しないようになってきている。雑草とかにピンポイントに効くものとか。魚とかの奇形ですが、最近のデータはどうなるのか気にしていくということでしょうか。

徳 差 スミチオンは今でも使って、売っていますよ。ボルドー液など強力なものはずっと昔に禁止されてしまった。

五十嵐(正) 数年前に沖館川でハゼとかヌマガレイを釣ったが全然、奇形はありませんでした。

小山内 除草剤などがどうなのか、現状把握が大事ですね。

工 藤 いまはいくら良くなってきているのかな。

室 谷 ずいぶん良くなってきていると思うんですよ。さっきハグロトンボの話をしましたけど、まだごく限られたところだけですが姿を見せるようになった。もっとも生息に適した環境そのものが少なくなっ
てしまいました。

五十嵐(正) いま、沖館川は一見、汚いように見えるがそれほど水質は汚染されていません。というのは上流に工場とかがありません。生活排水も下水道ができて流れ込むのが少なくなっている。ただ、海拔ゼロメートル地帯なので海からのゴミがすごい。流れ込んでそれが海に出るまではかなり時間がかかっている。

小山内 このあと新城川をキチンと調べればさまざまなものが出てきて多様性が分かると思う。

五十嵐(正) 新城川と二股川が合流しているんですが、その二股川の真上に市の最終処分場があって、そこから出し汁が流れている可能性がある。

小山内 ここはちょっとスゴイね。ジックリと調べて見る必要があるね。

野山には子どものオヤツがいっぱい!

棟方 この座談会は貴重。遊びをテーマにするって言うのは先見性がある。このように飲みながらしゃべっていると、自分たちが啓発されることにもなる。

徳差 遊びの原点にも触れている。なぜ「やぶなべ会」の生物部のOBたちがこういう話をしているのか。記録としてやはり書き残していく必要がある。

棟方 「やぶなべ会」というのは、真面目でなくて、真っ正直でもなくて、さりげなく原点に迫っている。

室谷 2時間以上も話してきたんですがまだ秋まで行っていません。さっきハシバミの実の話が出ました。秋というのは稔りの季節で果実が熟す。ただ山の実は、必ずしも秋だけではない。それを子ども達は何処にどういう実があるか知っていて、自然が与えてくれるオヤツでもあった。



写真7 ナワシログミ



写真8 クワ



写真9 ヤマブドウ

さっき徳差さんが遠足に行って、そのとき自分の穴場でハシバミを食べたら先生に怒られて家に帰されたということだったが、これはおかしい。むしろ先生は子ども達にそういった自然の楽しみ方を教えるべきです。遠足は単なる足腰を強めるだけではないと思うんですが。

五十嵐(正) 私はグミですね。それを浪館の山に食いに行く。浪館、今の三内丸山あたりにものすごく大きいグミの木があって、それに登って食べる。もう成っているな、熟しているなど頃合いを見て隣の同学年のこどもを誘っていく。ところが通り道にウルシ掻きの木があって、そこを通るだけでかぶれてしまう。可哀想だった。私は何ともない。

工藤 浪館には何でもあったね。グミもそうだしカンコの実、クワの実です。よく食べに行った。浪館のてっぺんの道路を行くと所々にクワの木があった。ヤマブドウも多かった。

五十嵐(正) 今の慈恵会病院があるね、あれを越えたあたりで運動公園のフェンスのあるところですよ。その下が採草地になっていた。そこには松林があって夏は木を蹴っ飛ばすとアカエゾゼミがギギッと落ちてきた。その下の沢目、沼の辺りにグミの大木があった。

室谷 豊さんはどうなんですか。

五十嵐(豊) 全然、記憶がない。兄貴と一緒にいったという記憶がないんです。

棟方 4つ違いば全然、遊びの世界が違ってしまふ。

工藤 浪館の山は町内で行った。子ども達が10何人も。浪館が一番近い山でスキー場もあったし、自衛隊がよくそこで練習していた。

山道 橋本からも一番近い山で、歩いて行ける。

蟹田のハイカラ山……今は道がない

扇野 私たちは、今は入って行けないんですがハイカラ山ってあるんです。駅の西側の蟹田小学校、ここ今は蟹田病院です。その脇をずっと行って焼き場(斎場)の裏をずっと入って登っていく。あまり高い山ではないんですが。しょっちゅう遊びに行きました。蟹田にいる同級生の話では、今は入って行けないって言ってました。昭和40年頃の中学生のときも道はあって、確かに草はずいぶん伸びていました。

徳差 何で今、入って行けないの。そこはハイカラだったんですか？

扇野 草が茂ってしまって道路がなくなりました。なんでハイカラだったかは分かりません。上はシバが生えていて一面が野原で見晴らしがすごく良かった。

室谷 さっきの浪館山もそうですけど、昔はこのような田畑がある田舎の近くには簡単に登って行ける山というか丘がありました。そこは田畑を耕し荷車などを引く馬・牛の餌にするため、採草地があって一面が原っぱです。お盆の頃は盆花としてキキョウとかオミナエシがいっぱい咲いて、それを摘んできては仏壇に供えるとか。馬・牛がいなくなって文化が発展したのか退化したのか、古里の野山が顧みられなくなると道路は消えてしまいます。これを“山が闇になってしまった。”と古老たちが嘆きます。私の高田も同じです。

棟方 太宰が行ったところもありましたね。

扇野 あれは駅から見ると、蟹田川の北側の観覧山です。

棟方 オレ、今日面白い話を聞いたよ。オレなんか一番最初に蟹田(営林署)に勤務して、あの辺はどこでも歩いた。ただ今のハイカラ山は、今日の一番の言葉で初耳だ。蟹田って面白いところで、ハイカラ山には大人の話がなくて、何か子ども達の面白い由来があったんでしょう。恐らく陸奥湾が一望できて、子ども達の最高の遊び場だったんでしょう。

小山内 蟹田には独自の文化があった。蟹田川ではシロウオもいっぱい捕れるし。

棟方 皆さんね、トゲクリガニは蟹田。オレは津軽はずいぶん歩いたけど、蟹田のトゲクリガニが一番なんだ。あそこの餌になる藻がちよっと違うんだと思う。オレね、人生で蟹田が一番で、胃を悪くしたのも全部蟹田が素晴らしかったから。あの頃は午後4時になれば執務停止で、宿直室にゾロゾロと集まって酒を飲む、カニを食べながら。係長がカニ買って来い、アレ買って来いと言う。当時、青森から通勤していたのは7、8人で肴倉(弥八)さんの甥とかも一緒に、オレはあそこで飲み過ぎた、胃全摘手術もこれが遠因ってこと。

五十嵐(豊) トゲクリガニは春だよ。オレも蟹田に行ったが、シロウオのシーズンが終わった頃でカニは食べられなかった。そのうちに他に(異動で)移った(異動)。確か駅の青森寄りの踏切の近くに合宿所があった。

棟方 オレくらい蟹田で仕事をした人はいない。ブナ林伐採反対で自然を守るのに大変だった。ヒバとブナをどのように持っていくか。

小山内 結局は、そのあと全部切られてしまった。

工藤 川が濁ってしまって魚も少なくなりました。少し雨が降れば水が赤くなってしまう。

棟方 当時は。ブナ林に咲くナツエビネはすごかった。あれはブナとヒバ林の混交林でないといけない。結局は東京へぶっ飛ばされて(転勤)、帰ってきて一番最初にナツエビネを見たくてそこに行った。何もない、あれくらい荒らされたところはない。

徳差 そうでしょう。業者たちが山を歩いて全部掘ってしまったんでしょう。

五十嵐(豊) ナツエビネは雑草みたいなものでいっぱいあった。オレが行ったときはそんな感じで、誰もこれに興味を示さなかった。何も綺麗な花ではないでしょう。

室谷 いや違う、紫色の綺麗な花。珍しい野生ラン、確か津軽半島は有名でしたね。北海道渡島半島の西に奥尻島があって、あそこにあるナツエビネと津軽半島のものは亜種レベルで違うと聞いたことがある。

徳差 ナツエビネは綺麗だ。普通のはジエビネで春先に咲いてしまう。夏の暑いときにナツエビネは咲いてくる。これは葉の間から蕾が出てきて花を付ける。すごく強いエビネで鉢植えで投げて(世話しない)置いても毎年咲く。ウチの庭では今年も咲いた。もう30年、40年も前からの鉢が3個ある。

室谷 食べる実はずっとあった。今は美味しいものはお金を出せばいくらでもあるけど、昔は子ども達には、買わなくても山に行けばオヤツがいっぱいあった。

棟方 そう、タニウツギの花、あれも食べた。

扇野 吸うんですね。

棟方 ほら、往年の淑女もちゃんと知っている。タニウツギって言うのはガジャシバのこと。

室谷 甘い蜜を含んでいるから、ときにアリが舐めにきている。美味しいおいしいと無我夢中で吸っているとアリも吸ってしまうことがある。蟻酸をもっているでしょう、とんでもないことになる。これと似た蜜を持った花は、灌木ではないがシソ科のオドリコソウというのがあり、この蜜もおいしい。

棟方 それ、オレはあまり経験していないんです。

扇野 ハイカラ山にも色々あって、登る途中にはアケビとかヤマブドウ、十五夜になるとそれを採ってきて飾って、そして食べる。アケビは中の種があるところよりも、むいた皮をテン普拉にして食べる。

次回のテーマ……“食べる物”を語ろう

棟方 今日は遊びだったけど、次は食べる物についてやったらどうか。

全員 それ賛成だ。まさに「やぶなべ会」だ。

小山内 昔、甘い物ってあまりなかった。砂糖のない時代だから。さっき塩の話が出たけど、塩というのは甘さもあるんだ。

室谷 食べる実で、トンジンってわかりますか？ 正式名はクマヤナギと言います。花が咲いて初め硬い実でやがて熟すと黒くなる。これは結構おいしいんです。つる性植物です。

工藤 それ知らない。どういう植物ですか。

棟方 実はアズキよりも小さい。葉っぱは楕円形。

小山内 市内の周りの山には方々にあると思うよ。

徳差 それからバライチゴがあったでしょう。毎年、採りに行くところが分かっている今でもある。

室谷 赤いの黄色いのと、どれもバラ科だけど味も違う。中にはものすごく赤くて綺麗なのがあつ

て、カミサマイチゴなんて言われたがこれは毒、ヘビイチゴの仲間なのかな。

徳 差 田圃の田のくろ(畦)にもあるね。あれナワシロイチゴですね。

室 谷 子ども達には春先のギシギシとかスイバ、田舎ではデンシですね。それから夏場はバライチゴ、クワ、秋にはトンジンナ、ヤマブドウ、アケビ。ハシバミもあるね。



写真10 タニウツギ



写真10 タニウツギ



写真12 アケビ



写真13 クマヤナギ

山 道 サルナシってあるね。コクワというものもある。サルナシとコクワは実の大きさが違う。サルトリイバラも食ったね。

棟 方 いやいや食べるものは、生きるために色々あった。これ、遊び以上に大切だ。縄文の末裔です。我々は素晴らしいところに生まれたと思う。今日だってすごい話がいっぱいだ。

小山内 次回は、甘さを求めてやりましょう。青森はこれから雪が多い。しかしこれを楽しまなければ。ヨーロッパのドイツなどとは同じくらいの緯度だけど、向こうは自然が貧困、ダメです。植物の種類から見ても少なくて……。



写真14 ナワシロイチゴ

(完)

参考文献

今 純三(1934) 青森県画譜

北 彰介(1975) オモチャッコ1(挿絵:山口晴温)

北 彰介(1975) オモチャッコ2(挿絵:山口晴温)